
ワールド バスケット

rivea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールド バスケット

【Nコード】

N08300

【作者名】

r i v e a

【あらすじ】

雑誌『花とゆめ』で以前連載されていた『フルーツバスケット』を『ヘタリア』キャラクターでやったなら？

そんな、連載です。主人公の透くんは、喋り方から日本に。まさかのあの人が、ヘタだとあのキャラクターに!?

ヘタキャラの男女比を考えて、変身設定など、設定はいろいろいじってあります。

今のところ、ラストはちょっと変えていこうと考えております。

第一話〜1（前書き）

この小説は高屋奈月先生の『フルーツバスケット』をヘタリアのキャラクターでやってみようという小説連載になっております。

男女比を考えて設定やラストを弄ってはおりますが、根本にはフルバのあらすじがあると思って下さい。

もしよければ、ヘタリアの二次小説サイトもやっておりますので下記からどうぞ。

U R L h t t p : / / s a k u r a k a e r u . w e b . f c 2 .
c o m /

第一話 1

「宴会を始めましょう」

皆と楽しくいつまでもー

「今日も暑いですね。っと、そろそろ参りましょうか」

はじめまして。

私の名前は、本田菊と申します。

些か家庭事情に諸々の問題を抱えておりまして、ただいまひとり楽しく気ままなテント生活などをおくっております。

決して楽な生活とは言えませんが、あれもこれも何も並べて全て萌えに変換してしまえば、これも中々楽しめること間違いありません。身体は俗世にまみれようと、精神は二次を謳歌する元気な高校生です。

「しかし、まだ少し時間があるのも事実。今日はいつもより遠回りして学校に行きましょうか」

菊はガサガサと周囲に生い茂る草をかき分けて、平らな地面やコンクリートの見える下方まで降りてきた。

そうして歩いていくうちに、一軒の大きな家を発見する。

「……随分大きなお家ですね。セレブでしょうか？」

軒先から、室内をそっと窺う。しかし、人影は見えない。代わりに、軒先に飾られている幾枚もの絵を発見する。

子丑寅……この並びで動物が描かれているということは、題材は十二支だろう。細かいところまで繊細なタッチで描かれていて、なんだか視線が吸い付けられる。不思議な作品だ。きれいで、けれどそれだけではない。

なんだか、少しの怖さと・・・悲しさを併せ持つようである。

「あれれ〜！ わーお。こんなところに随分可愛いこがいるねえ〜」

驚いて顔を上げると、廊下からこちらに向かってくるひとりの男性。

「わっ、すいません。かつてに見せていただいたておりました！」

外人さんです！ 菊の声が思わず上擦る。

自身とは全く似ても似つかぬほどの美丈夫が、にこにこ笑顔でこちらを見ている。肩の上でふわふわと跳ねる柔らかなハニーレモンの金髪が目眩しい。

「ああ、それ。気に入った？ 俺も気に入ってるんだよね」

「はい！ とても素敵ですね・・・でも」

「？」

菊は相手の言葉に元気よく頷いてから、言葉を濁した。

「でも、・・・やはりこの中に猫はいないのでね」

少しだけ残念そうに、菊がポツリと呟く。

男は菊の意見に意外そうに表情を見張らせた。

「猫って、あのchat？」

「？ はい。十二支で一匹だけ仲間はずれの、猫です」

男の発音をいまいち聞き取れなかった菊だが、文面から相手の言っている内容を予測し、頷いた。

日本では昔語りとして有名な十二支の話。

神様が宴会を開く際、動物たちをその宴会に招待した。

しかし、悪戯好きのねずみが猫を捕まえて、宴会の日を一日ずらして教えてしまいます。それにより、後日、多くの動物たちが宴会に出席する中、騙された猫だけが、神様との楽しい時間を過ごすことができませんでした。

こうして、十二支として動物たちが神様と共に奉られる中、猫だけが今も仲間外れとしての扱いを受けているのです。

「幼い時分にその話を聞きまして、あまりにも猫が不憫でもらい泣きをしたほど、思い入れがありました」

初対面の方にこんな話をするだなんて、おかしいですね。

菊は柔らかに苦笑する。けれど、目の前の男ならこんな自分の話も受け入れてくれるだろうなんて、なんてかってな言い分。

「へえ、あいつがそれを聞いたら、どんな反応するかな」

あいつ？ 菊が不思議そうに男を見上げる。

「それよりも、君って本当に可愛いよね。今から暇？」

菊よりも背の高い男がずいっと身を乗り出してくる。

菊は自然と後ろに身を引きながら、ええと・・・と言葉を濁した。

なんだろう、この人。イケメンでナンパ癖の強い方でしょうか？

それにしても、可愛いって！ 私は制服からもわかる通り、列記とした日本男子ですよ！？」

「なあ〜にしてんだあ〜この髭があ！！！！？」

「・・・っ!？」

「えっ！ カ、カーランドさん!!」

突如として飛んできた鞆はコントロールよく、菊の目前に迫っていた男の後頭部に激突する。すたすたと迷いない足音でこちらにやってきたのは、まさかの菊のクラス、否・・・学園のアイドルと化しているアーサー・カーランドであった。

アーサーはぶつかって床に落ちた自分の鞆を拾い上げると、ぐるんと菊の方を見る。菊は蛇に睨まれた蛙の気分で、背筋をぴんと伸ばした。

「大丈夫か、本田？ 朝から、俺のいとこが迷惑かけたな」

象徴的な太い眉に、きらきらした濃い金髪。おまけに瞳がエメラル

ドとくれば、彼が王子様と密かに慕われるのもよくわかるかもしれない。

こんな朝から、濃い方ばかり拝ませていただいて、今日は実に豊作・素敵な出会いに感謝ですね。

「カークランドさんのお家でしたか、さすが王子は住む家が違いますね」

「本田？」

「いえ！ こちらの話です。ええと、よくわかりませんが助けて下さってありがとうございます」

菊がにこやかに微笑んで礼を告げると、アーサーはいやと視線を泳がせて、悪かったな送るよ一緒に行こうと言った。

こんな機会、二度とありません。生王子！ 眼福のきわみ！！

「ありがとうございます。では、参りましょうか、カークランドさん」

腹の底で考えていることをおくびにも出さず、菊はお得意の笑顔で誤摩化して、アーサーを促した。

菊の笑みをよく理解していないアーサーだったが、とりあえず遅刻するわけにはいかないと、最後に足下に倒れる変態を一蹴りしてから靴を履き替え菊の隣に並んだ。

二人は同じクラスということもあり、意外に話も弾んで登下校の道を進んでいった。

「酷いなあ、ぼっちゃん。でも、ホンダ君か・・・」

なんだか、風向きが変わりそう。

これから楽しくなるかもね、アーサー。

第一話〜1（後書き）

本家の漫画に沿って、少しずつ進めて参りたいと思いますので良かったらおつきあい下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0830o/>

ワールド バスケット

2010年10月11日16時17分発行